二程の墓

吾　妻　重　二

2002年３月26日、河南省伊川県にある二程の墓を訪れた。本学の井上克人教授を研究代表者とする科研費による調査のひとつで、同行者は他に丹治昭義教授、奈良行博講師、および花園大学の吉田剛講師である。

朝、マイクロバスで鄭州を出発、中岳嵩山、少林寺を経て、午後に二程の墓に向かった。到着前、土地の女性に路を尋ねたとき、地図にある「二程墓」と言わずに「程夫子墓」という丁寧な答えが返ってきたのにまず驚いた。かつて二程の思想が唯心主義の権化として批判されていたことを考えると、まさに隔世の感というべきである。二程が再評価され、土地の人々にとっては郷里の偉人でもあることを、この呼称はよく表わしているように思われた。

伊川県は洛陽からも近く、南へ20キロほどしか離れていない。かの龍門石窟の前を流れる伊河の上流に位置し、広々とした畑が続く田園地帯である。伊川県の中心街は、今でこそかなり賑やかであるが、かつては府店という名の小鎮にすぎず、北宋の二程の時代には神陰郷と呼ばれていた。なお、今回は調査できなかったが、伊川県内には他に、二程とともに洛陽に居住し、互いに親密に交遊した邵雍、文彦博の墓も営まれている。

さて、二程の墓は伊川県中心街の西1.5キロほどの郊外にある。白い屏にぐるりと囲まれ、柏樹が墓域の中にだけ生い茂っているので、一目でそれとわかる。広大な畑の真ん中に、鬱蒼たる深緑の一区画が小島のように浮き出ているという感じで、すこぶる印象的である。墓域は東西205m、南北138m、面積約３万㎡というから相当広い。ここにはまず、後述する程琳が葬られたあと、程珦の死去に際して塋地120畝を賜わったと伝えられ、これが現在の墓域の基礎になったのである。

正面には立派な山門（中門）があり、「程園」という額が掲げられていた。墓地にしてはいかにも不釣合いな大きな門なので、パンフレットを見ると、この門は1987年12月に新しく造られたものであった。「程園」という名前から窺い知られるように、ここを記念公園として開放し、観光地にしようという目的による所作であるらしい。墓域の本来の門は、この山門の左手にある小門だったようで、そこには「程祠」の額が掛かっていて、内側に墓祠（祠堂）が続いている（写真１）。そして、この墓祠の背後に程顥と程頤、および彼らの父程珦の墓があるのである。広い墓域内にはまた、一族の他の人物の墓冢があり、その位置関係は、ひとまず山際明利氏の図を借りれば、図１のとおりである。

写真１　程園遠望
中央が新しい山門　左手が程祠の門

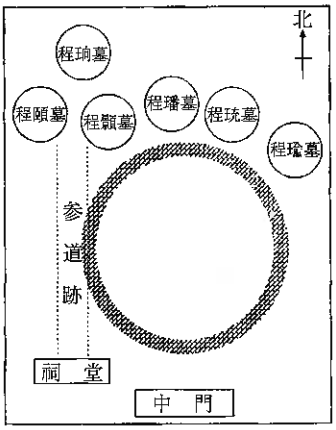

図１　程園概略図
（山際明利「北宋四子墓探訪記」『東方』2001年２月号）

写真２　程子の墓
右手奥が程珦墓　左手前程頤墓（奈良行博氏撮影）

まず、墓道を真っ直ぐ行った正面に程珦の墓があり、向かって右側手前に程顥の墓が、左側手前に程頤の墓がある。これは昭穆形式による配置であって、ほかならぬ二程自身が『周礼』春官冢人の記述にもとづいて考案したものである。そのことは、程頤が、

「葬の穴は、尊者は中に居り、昭を左にし穆を右にして次す」　（程頤「葬説」）

といい、また、

「程氏は、先生兄弟より、葬る所昭穆を以て穴を定む」　（『程氏外書』巻11―62）

と伝えられることからわかる。現在、墓冢はいずれも直径８ｍ、高さ２ｍほどあり、前には清の雍正年間に造られた墓表が立っていて、それぞれ「宋儒程伯温先生墓」「宋儒程明道先生墓」「宋儒程伊川先生墓」の字が刻まれている（写真２）。

このうち程顥の場合についていうと、『程氏文集』巻11に見るように、がんらいは文彦博による「大宋明道先生程君伯淳之墓」の題字を刻み、碑陰に程頤撰の銘を記した墓表が建てられていたはずなのであるが、すでに失われて見ることができないのは残念であった。また、韓維の書いた程顥墓誌銘も墓中に埋められていたはずであるが、やはり残っていない。他の例に漏れず、彼らの墓も盗掘と破壊を免れなかったのである。

墓の内部がどのような構造になっていたのかはもちろんわからないが、おそらくは近年、墓誌銘の発見によって注目を浴びた王拱辰のそれに近いものであったと想像される。王拱辰は二程の遠い姻戚にあたる人物であって、それらのことについては「北宋王拱辰墓及墓志」（『中原文物』1985年第４期）および王曾瑜「河南程氏家族研究」（『中国近世家族与社会学術研討会論文集』所収、台湾・中央研究院）が考証しているので、参照されたい。このほか、墓道の左右には明の宣徳年間に造られた石人、石羊、石虎、石望柱が置かれているが、上部が欠けたりしていて風化がはなはだしい。

この三人の墓の東側には、図１に見るように、程璠、程珙、程瑜の墓が並んでいる。ただし、図には記されていないが、さらにこの東側に、三司使・参知政事を歴任し、文簡の諡を賜わった一族の出世頭である程琳の墓、および程顥の夭折した子である程端慤、澶娘、孝女の三人の墓もある。彼らの埋葬に関しては、『程氏文集』巻４および巻12に詳しい記述があり、程琳については欧陽脩の書いた墓誌銘が『欧陽脩全集』

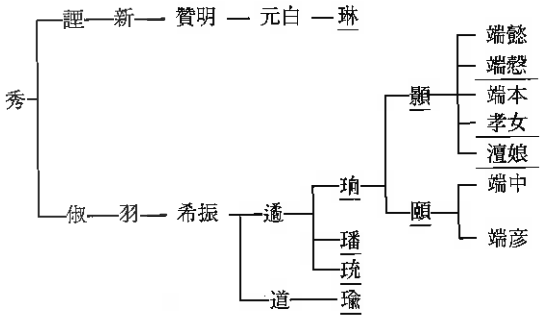

図２　程氏の家系

写真３　墓祠享堂内部
中央が程珦、右が程顥、左が程頤

巻31に載っている。図２に示したのは程氏の家系であって、下線を付した人物がここに埋葬されているわけである。二程のこれ以外の子孫は、靖康の変のとき金軍の進入を逃れて南渡したために、ここに墓が営まれることは結局なかった。

さて、墓祠（祠堂）の方は、明の宣徳年間に建てられ、清代の重修を経て、最近修復されたものである。現在、東西の廂房は管理人の住まいになっていて、洗濯物が干してあり、子供が無邪気に出入りしたりしていた。そして、その一番奥に三間からなる享堂があり、程珦、程顥、程頤三人の塑像が置かれている（写真３）。この塑像は1987年の修復時に造り直されたもので、面白いことに、塑像の手前に功徳箱が置いてある。功徳箱は仏教寺院や道観によく見られ、日本の賽銭箱に相当するものであるが、これは、実在した個人が仏や神々に似たかたちで今も崇拝されていることを意味していて、たいへん興味深い。

墓祠の中庭には石碑が数点残っていた。韓国朱子学会による真新しい「二程夫子林」の碑もあり、近年における顕彰の趨勢を示していた。墓祠内の壁には、修復の募金を呼びかける「捐資修繕程園倡議書」が貼ってあり、文中に、

「我們号召海内外程氏後裔及有識之士，少抽一包煙，少喝一杯酒，各尽所能，積極捐資」

とある。「タバコ一箱を節約し、酒一杯を節約して、それぞれできる範囲で積極的に募金してほしい」というのであるが、何ともほほえましく、かつ切実な呼びかけではないか。

さて、墓域の中央は一面の菜の花畑であった。ちょうど満開の時期で、まばゆい黄色に輝く花に囲まれて、地元の人であろう、数人が車坐になってのんびり話をしている姿が見うけられた。墓地と菜の花と春遊という取り合わせ、これも正直、悪くない光景であった。短い滞在ではあったが、文献資料と現況を相互につきあわせることができたのもまた、大きな収穫であった。

（この文を草するにあたって、宮崎順子、緒方賢一両氏から資料の教示を得た。感謝申し上げたい。）